

二葉亭四迷

小說總論



小  
說  
總  
論



人物の善悪を定めんには我に極美（アイデアル）なかるべからず。小説の是非を評せんには我に定義なかる可らず。されば今書生しよせい気質かたぎの批評をせんにも、予あらかじめ主人の小説本義を御風聴して置かねばならず。本義などという者は到底面白きものならねば、読むお方にも退屈なれば、書く主人にも迷惑千万、結句ない方がましかも知らねど、是も事の順序なれば、全く省く訳にもゆかず。因よつて成るべく端折って記せば暫時の御辛抱を願うになん。

凡<sup>およ</sup>そ形（フォーム）あれば茲<sup>ここ</sup>に意（アイデア）あり。  
 意は形に依つて見<sup>あら</sup>われ、形は意に依つて存す。物の生存  
 の上よりいわば、意あつての形、形あつての意なれば、  
 孰<sup>いづれ</sup>を重とし、孰を軽ともしがたからん。されど其持前  
 の上よりいわば、意こそ大切なれ。意は内に在ればこそ  
 外に形<sup>あら</sup>われもするなれば、形なくとも尚<sup>なお</sup>在りなん。され  
 ど形は意なくして片時も存すべきものにあらず。意は己  
 の為<sup>き</sup>に存するものゆえ、嚴<sup>きびしく</sup>敷いわば形の意にはあらで、

意の形をいうべきなり。夫かの米ベリンスキー魯国の批評家が、世間唯一意匠ありて存すといわれしも、強あながちに出放題にもあるまじと思わる。

形とは物なり。物動いて事を生ず。されば事も亦また形なり。意物に見あらわれし者、之を物の持前という。物質の和合也。其事に見われしもの、之を事の持前という。事の持前は猶なほ物の持前の如く是亦形を成す所以ゆえんのものなり。火の形に熱の意あれば、水の形にも冷の意あり。されば火を見ては熱を思い、水を見ては冷を思い、梅が枝えに嘖そええずる鶯うぐいすの声を聞きくときは長閑のどかになり、秋の葉末すだに集く虫の

音を聞ときは哀あわれを催す。若もし此かくの如く我が感ずる所を以て之を物に負わすれば、豈あに天下に意なきの事物あらんや。

斯かくいえばとて、強あながちに実際にある某の事、某の物の中に、某の意全く見あらわれたりと思ふべからず。某の事物には各々其特有の形状備そなわりあれば、某の意も之が為に隠蔽せらるる所ありて、明白に見あらわれがたし。之を譬たとうるに、張三も人なり、李四も亦人なり。人に二なければ、差別あるべき筈なし。然るに此二人のものを見て、我が感ずる所に差別あるは何ぞや。人の意ことごとく張三に



見われたりといわんか、夫かの李四を如何いかん。若もし李四に見わ  
 れたりといわんか、夫の張三を如何。して見れば、張三  
 も李四も人は人に相違なけれど、是れ人の一種にして、  
 真の人にあらず。されば未だ全く人の意を見わすに足ら  
 ず。蓋けだし人の意は我脳中の人に於て見わるるものなれど、  
 實際箇々の人に於て全く見わるるものにあらず。其故如  
 何と尋るに、實際箇々の人に於ては各々自然に備わる特  
 有の形ありて、夫の人の意も之が為に妨げられ、遂に全  
 く見われ難きによるなり。故ゆえにいわく曰、形は偶然のものにし  
 て変更常ならず、意は自然のものにして万古易かわらず。易

らざる者は以て当あてにすべし、常ならざる者豈あに当にならんや。

偶然の中に於て自然を穿鑿せんさくし、種々の中に於て一致を穿鑿するは、性質の需要とて、人間にはなくて叶わぬものなり。穿鑿といえど、為方しかたに両様あり。一は智識を以て理会する学問上の穿鑿、一は感情を以て感得する美術上の穿鑿、是なり。

智識は素もと感情の變形、俗に所謂智識、感情とは、古参の感情、新参の感情といえることなりなんぞと論じ出しては面倒臭く、結句迷惑まよごつきの種を蒔くようなもの。そこ

で使いなれた智識、感情といえる語を用いていわんには、  
 大凡世おおよその中万端の事智識ばかりでもゆかねば、又感情ば  
 かりでも埒明らちかず。二二ンが四といえることは智識でこ  
 そ合点すべけれど、能よく人の言うことながら、清元きよもとは意  
 気で常磐津ときわは身みがあるといえることは、感情ならでは解わか  
 らぬことなり。智識の眼より見るときは、清元にもあれ、  
 常磐津にもあれ、凡おほそ唱歌といえるものは皆人間の声に  
 調子を付けしものにて、其調子に身の有るものは常磐津  
 となり、意気なものは清元となると、先まず斯か様ように言わね  
 ばならぬ筈。されど若し其の身のある調子とか、意気な

調子とかいうものは、如何なもので御座る、拙者未だ之を食うたことは御座らぬと、ひようきんもの剽輕者あつて問を起したらんには、よしや富婁那ふるなの弁ありて一年三百六十日饒舌しやべり続けに饒舌りしとて、此返答は為切しきれまじ。さる無駄口ひまつぶに暇潰さんより、手取疾てつとりばやく清元と常磐津とを語り較べて聞かすが可よし。其人聾なうにあらざるよりは手を拍うつてナルといわんは必定。是れ畢ひつきよう竟するに、清元、常磐津直接に聞手の感情の下に働き、其人の感動（インスピレーション）を喚起し、斯くて人の扶助を待たずして自ら能よく説明すればなり。之を某学士の言葉を仮りていわば、

是れ物の意、たもちあい保合の中にあら見われしものというべき乎。か

然るに意氣と身といえる意は、天下の意にして、一二唱歌の私有にはあらず。但ただ唱歌は天下の意を採って之に声の形を付し、以て一箇の現象とならしめしまでなり。されば意の未だ唱歌に見われぬ前には、宇宙間の森羅万象の中にあるには相違なけれど、或は偶然の形に妨げられ、或は他の意と混淆しありて、容易には解るものにあらず。斯程かほど解らぬ無形の意を、只一の感動（インスピレーション）に由つて感得し、之に唱歌といえる形を付して、尋常の人にも容易に感得し得らるるようになせしは、

是れ美術の功なり。ゆえにいわく 故曰、美術は感情を以て意を穿鑿するものなり。

小説に勸懲、摸写の二あれど云々の故に、摸写こそ小説の真面目しんめんもくなれ、さるを今の作者の無智文盲とて、古人の出放題に誤られ、痔持の療治をするように矢鱈やたら無性に勸懲々々というは何事ぞと、近頃二三の学者先生切齒はがみをしてもどかしがられたるは、御ごもつとも尤千万とおぼゆ。主人の美術定義を拡充して之を小説に及ぼせばとて、同じ事なり。そもそも抑々小説は浮世に形あわわれし種々雑多の現象（形）の中にて其自然の情態（意）を直接に感得するものなれ

ば、其感得を人に伝えんにも直接ならでは叶わず。直接  
 ならんとは、摸写ならでは叶わず。されば摸写は小説  
 の真面目なること明白なり。夫かの勸懲小説とは如何なる  
 ものぞ。主実主義（リアリズム）を卑かるんじて二神教（ヂ  
 ュアリズム）を奉じ、善は悪に勝つものとの当推量あてずいりようを  
 定規として、世の現象を説とんとす。是れ教法の提ちよう灯持ちんもち  
 のみ。小説めいた説教のみ。豈あに呼よんで真の小説となすに  
 たらんや。さはいえ、摸写々々とばかりにて、如何なる  
 ものと論定ろんじさだめておかざれば、此方にも胡乱うろんの所あると  
 いうもの。よって試に其大略を陳のべんに、摸写といえるこ

とは実相を仮りて虚相を写し出すということなり。前にも述<sup>のべ</sup>し如く、実相界にある諸現象には自然の意なきにあらねど、夫の偶然の形に蔽われて判然とは解らぬものなり。小説に摸写せし現象も、勿論偶然のものには相違なけれど、言葉の言廻し、脚色の摸様によりて、此偶然の形の中に明白に自然の意を写し出さんこと、是れ摸写小説の目的とする所なり。夫<sup>そ</sup>れ文章は活<sup>いき</sup>んことを要す。文章活ざれば意ありと雖<sup>いへど</sup>も明白なり難く、脚色は意に適切ならんことを要す。適切ならざれば意十分に発達すること能<sup>あた</sup>わず。意は実相界の諸現象に在っては自然の法則



に随つて発達するものなれど、小説の現象中には其発達を得て論理に適かなわぬものなり。譬たとえば恋情の切なるものは能く人を殺すといえることを以て意と為したる小説あらんに、其の本尊たる男女のもの、共に浮氣の性質にて、末の松山浪越さじとの誓せい文も悉しつ皆鼻の端の嘘言、一時の戯たわむならんとせんに、末に至つて外に仔細もなければ、只親おや仁の不承知より手に手を執つて淵川に身を沈むるといふ段に至り、是ではどうやら洒落しやれに命を棄て見る如く聞えて、話の条理わからぬ類たぐいは、是れ所謂意の発達、論理に適わざるものにて、意ありと雖も無に同じ。之を

できそこないちゆう  
出来損中の出来損とす。

夫れ一口に摸写と曰うと雖も、豈容易の事ならんや。

羲之ぎしの書をデモ書家が真似しとて、其筆意を取らんは難  
く、金岡かなおかの画を三文画師が引写にしたればとて、其神そのしんを

伝つたえんは難し。小説を編むも同じ事也。浮世の形を写す

さえ容易なことではなきものを、況ましてや其の意をや。浮

世の形のみを写して其意を写さざるものは下手の作な

り。写して意形を全備するものは上手の作なり。意形を

全備して活いきたる如きものは名人の作なり。蓋けだし意の有無

と其発達の功拙とを察し、之を論理に考え、之を事實に

徴し、以て小説の直段<sup>ねだん</sup>を定むるは是れ批評家の当<sup>まさ</sup>に力<sup>つと</sup>むべき所たり。

(明治十九年四月)



日本文学電子図書館

---

## 小説総論

著者：二葉亭四迷

制作者：宮澤一郎

底本：現代日本文學大系 1

「政治小説・坪内逍遙・二葉亭四迷集」

筑摩書房

昭和46年2月5日 初版第一刷発行

日本文学電子図書館